

KP全体講義 ループリック説明

研究部（3456KPコーディネーター） 山本



論文評価基準

ハンドブック p.25,26

評価 \neq 成績

評価 = 目標の達成具合



論文評価基準

ハンドブック p.25,26

ループリックの観点	3年	4年	5年	6年
1(1)問題設定とその意義が明確か	○	○	○	○
1(2)問い→根拠→結論の論文の構造に整合性があるか	○	○	○	○
1(3)研究内容と題目が一致しているか。	○	○	○	○
2(1)研究内容の新規性は示されているか？			○	○
2(2)実験・調査手法や資料収集手法が適切か		○	○	○
2(3)得られた結果や情報の分析・考察が適切か			○	○



論文評価基準

■ ルーブリック見方

1. 問題提起、研究手法、結論が首尾一貫しているか

規準	1(1) 問題設定とその意義が明確か。	1(2) 問い 根拠 結論の論文の構造に整合性がある。	1(3) 研究内容と題目が一致しているか。
S 基準			
S 具体的な特徴			
修正方針			
A 基準	卒業論文で解決する問いが明確であり、その問いがどのような社会的意義もしくは学問的意義につながっているかが明確に示されている。	問い→根拠→結論の間の整合性が明確に認められる。	研究内容を必要十分に要約した題目となっている。
A 具体的な特徴		明確に定義された問いに対して、調査で明らかになったことと先行研究のみを根拠として、明確な結論を出している。	
修正方針	その問いを解決することがいかに重要であるかを社会的な意義の側面、もしくは学問的な意義の側面のどちらから明記する。	調査設計の段階、もしくは調査結果がある程度見えてきた段階で、調査内容が問いに答えられるような内容であるかを確認する。必要に応じて調査内容が問いを調整する。 また、得られた調査結果から結論を組み立てる時に、調査結果でわかったことからどこまでは言えて、どこからは言えないか検討する。	研究の問いと根拠と結論がほぼ定まったのち（多くの場合は論文本文がほとんど完成した後）に、この研究で行ったことを広すぎず狭すぎず適切に表す題目を改めて考える必要がある。多くの場合は題目が広くなる傾向があるので、具体的にこの研究で解決した内容や探究した内容を表す題目にする。
B 基準	卒業論文で解決する問いが明確である。	問いに明確に対応した結論を出しているが、Aの基準には至らない。	研究内容を反映している題目であるが、実際の研究内容よりも広い（もしくは狭い）内容を指す題目となっている。
B 具体的な特徴		問いと根拠の間の整合性が明確ではないか、根拠と結論の間の整合性が明確でないかのどちらかである。	
修正方針	研究には必ず「問い」が必要であり、その問いを誰が読んでもわかるように明記する。	出した結論が問いに対する答えになっているのかどうか確認し、結論を問いに対する返答になるようにする。得られた結果や考察の内容に応じては、問いの方を微調整して、問いと結論を対応させることもあり得る。	研究で行った内容についての題目を付ける。
C 基準	卒業論文で解決する問いが何なのか明確にはなっていない。	問いに明確に対応した結論を出すことができていない。	研究内容をほとんど反映しない題目
C 具体的な特徴			

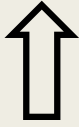
A基準

ランクアップするには

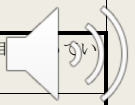


B基準

ランクアップするには



C基準



1. 問題提起、研究手法、結論が首尾一貫しているか

1(1) 問題設定とその意義が明確か。

A基準

卒業論文で解決する問いが明確であり、その問いがどのような社会的意義もしくは学問的意義につながっているかが明確に示されている。

↑修正方針

その問いを解決することがいかに重要であるかを社会的な意義の側面、もしくは学問的な意義の側面のどちらかから明記する。

B基準

卒業論文で解決する問いが明確である。

↑修正方針

研究には必ず「問い」が必要であり、その問いを誰が読んでもわかるように明記する。

C基準

卒業論文で解決する問いが何なのか明確にはなっていない。



1. 問題提起、研究手法、結論が首尾一貫しているか

1(2) 問い→根拠→結論の論文の構造に整合性があるか。

A基準

問い→根拠→結論の間の整合性が明確に認められる。



修正方針

調査設計の段階、もしくは調査結果がある程度見えてきた段階で、調査内容が問いに答えられるような内容であることを確認する。必要に応じて調査内容か問いを調整する。
また、得られた調査結果から結論を組み立てる時に、調査結果でわかったことからどこまでは言えて、どこからは言えないか検討する。

B基準

問いに明確に対応した結論を出しているが、Aの基準には至らない。



修正方針

出した結論が問いに対する答えになっているのかどうか確認し、結論を問いに対する返答になるようにする。得られた結果や考察の内容に応じては、問いの方を微調整して、問いと結論を対応させることもあり得る。

C基準

問いに明確に対応した結論を出すことができていない。



1. 問題提起、研究手法、結論が首尾一貫しているか

1(3) 研究内容と題目が一致しているか。

A基準

研究内容を必要十分に要約した題目となっている。



修正方針

研究の問いと根拠と結論がほぼ定まったのち（多くの場合は論文本文がほとんど完成した後）に、この研究で行ったことを広すぎず狭すぎず適切に表す題目を改めて考える必要がある。多くの場合は題目が広くなる傾向があるので、具体的にこの研究で解決した内容や探究した内容を表す題目にする。

B基準

研究内容を反映している題目であるが、実際の研究内容よりも広い（もしくは狭い）内容を指す題目となっている。



修正方針

研究で行った内容についての題目を付ける。

C基準

研究内容をほとんど反映しない題目となっている。



2. 説得力のある結論を導くことができているか

2(1) 研究内容の新規性は示されているか？

A基準

高校生向け学術雑誌に投稿できるレベルの新規性があることが示されている。



修正方針

自分が立てた問いと全く同じ答えが、先行研究では発表されていないことを示す。なお、ごくわずか（対象が違う、手法が違うなど）でも違いを見つければよい。

B基準

研究内容に日本で行われる高校・中学・小学の教育課程で教えられる内容を超える新規性があることが示されているが、日本語で発表された研究を超える新規性があることは示されていない。



修正方針

自分が立てた問いの答えが、直接的な形では教科書やすぐに見つかるような入門書には書いていないことを示す。

C基準

研究内容に日本で行われる高校・中学・小学の教育課程で教えられる内容を超える新規性があることが示されていない。



2. 説得力のある結論を導くことができるか

2(2) 結論に説得力があるか：実験・調査手法や資料収集手法が適切か

A基準

高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方を十分に活用して実行された手法である。

↑
修正方針

選んだテーマによって実行可能性という意味での難易度は大きく異なるが、必要に応じて問いを小さくする、対象を明らかに差が出そうなものにするなど、自分の興味がもてる範囲で解決しやすい問いに変更する。

B基準

高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方を部分的に活用して実行された手法である。

↑
修正方針

調査を行うにあたって、仮説検証型ではない（仮説がない）、または探索的調査であるが、観点が定まっていないなど、問いが探究可能な形になっていないと考えられる。よって、仮説や観点を明確に定めた上で、実験・調査や資料の収集を行う必要がある。

C基準

高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方をほとんど活用することのなかった手法である。



2. 説得力のある結論を導くことができるか

2(3) 結論に説得力があるか：得られた結果や情報の分析・考察が適切か

A 基準	高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方を十分に活用して行った分析・考察である。
↑ 修正方針	<ul style="list-style-type: none">・ 調査に対して一定以上の努力量を要求する。・ 結果を考察するにあたって、結果の前提となるサンプリングの偏りや他に考えられる可能性などを検討する。
B 基準	高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方を部分的に活用して行った分析・考察である。
↑ 修正方針	<ul style="list-style-type: none">・ 問いに対応した調査を行う。・ 必要に応じて調査結果から言える内容になるように問いを微調整する。
C 基準	高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方をほとんど活用することのなかった分析・考察である。



2. 説得力のある結論を導くことができるか

各観点にはS基準が存在する。

	2(1) 研究内容の新規性は示されているか？	2(2) 結論に説得力があるか：実験・調査手法や資料収集手法が適切か	2(3) 結論に説得力があるか：得られた結果や情報の分析・考察が適切か
S基準	学術雑誌に投稿できるレベルの新規性があることが示されている。	全体として、高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方を十分に活用して実行された手法であり、さらに部分的には高校のレベルを大きく超えた部分がある手法である。	全体として、高校の教育課程での修得が期待される知識・技能や見方・考え方を十分に活用して行った分析・考察であり、さらに部分的には高校のレベルを大きく超えた部分がある分析・考察である。



論文評価基準

ハンドブック p.24

チェックリスト

- 論文全体の体裁
- 表紙・目次
- 文章の書き方
- 図表や文献

